

# 推薦の言葉

近年、判断根拠の確立や患者本位の医療の社会的要請が大きくなってきている。本来、臨床としてはあたりまえのことだが、このことを自分自身で身をもって理解し、実際に目の前でやって見せられる先生がほとんどいないのが悲しい現状である。たとえば、テニスはいくら本を読んだり、ビデオを見たりしても、それだけでは決して上手くならない。コートに出て、ラケットで球を打ち、お手本を見て初めて実感できる。しかし上手くなるにはテニスのアート、技（わざ）を直接指導するコーチが必要だ。プロとしての医師にとっては、本書でくり返されているように、「数値は臨床的枠組みのなかで初めて意味付けをされる」のであり、それを理解、判断するにはアートとしての対話・経験・臨床診断能力が不可欠となる。本書は単なる統計学解説書を超えた問題解決型医学教育の実践書でもあり、まさにテニスの実践コーチである。

本書は日常診療に必要な統計学の知識と活用法を簡潔に解説していく、わかりやすいスタイルで進み、統計学と臨床の親密さを教えてくれる。各項目の最重要点から歯切れよく始まり、「学習目標（Point覚えるべきこと、関連Question）」が明文化されていて読みやすい。解説の最後には「まとめ」や「参考」が示され、至れり尽くせりの丁寧な解説書である。ケーススタディではEBMの実践法が紹介されている。コラムは統計学以外の話題も多く、楽しませてくれる。丁寧な構成で、工夫がされている。

私は能登君が学生のときから、そして研修医としてもお付き合いした。すぐに周りに伝わる温かい人柄、視野が広く、教育熱心で、患者さんからの信頼も厚い臨床医であり、優れた臨床教育者としてどんどん成長している。以前、私の主催した医学教育学会でも「実践的EBMワークショップ」を引き受けてくれて、大いに人気があった。米国での臨床研修から帰国後、さらに内分泌専門医をめざしてフェローとして2度目の渡米も果たした。いかにわかりやすく書くかに苦心しているあたりに、プレゼンテーションや対話で日常的に鍛えられる米国での臨床医の成長とその成果がよく出ている。さらに素晴らしいことは、留学で習得したことを、この本を通じて日本の皆さん、特に若い医師たちに還元しようとしていることであり、人を育てたい、後輩に伝えたい、医療を良くしたいという熱意が伝わってくる。

このような気持ちが自然にわいてくるのは、自分自身が、日本だけではなく、米国での臨床研修の年月の間に、多くの優れた臨床指導医たちから受けた実践的研修と、そこから伝わる教育の恩恵を身にしみているからこそである。教育とは基本的にこのような世代を超えて作られる好循環によって初め

て世に言う教育となつてゆくプロセスなのだ。それは、本物の良質な教育を受けた人たちにしかわからない、教育の本質でもある。

日本のこれからの医学教育や患者本位の診療に関して指南に富んだ好著であり、あらゆる医療者にお勧めしたい。

2011年6月吉日

政策研究大学院大学 教授  
Health and Global Policy Institute 代表理事  
**黒川 清**